

## 看護学部教官業績目録

—2002年1月～12月—

## 基礎看護学教育研究分野

## 〔学会発表抄録〕

1. 和住淑子：看護理論に導かれた振り返りによる看護職者としての評価能力の発展。第22回日看科会講演集, 99, 2002.
2. 和住淑子, 青木好美, 河部房子, 永田亜希子, 斉藤しのぶ, 野々村みち子, 徳本弘子, 山本利江：F. ナイチンゲールにおける「人間の発展過程に関する見方」—『思索への示唆』第1章（1段落～18段落）より—。ナイチンゲール研究学会第23回研究懇談会, 24—30, 2002.
3. 竹中敦子, 青木好美, 和住淑子, 池田ちづ子, 熊木光枝, 山本利江：看護者が安定して看護できるための対象像の描き方—根治できない段階で放射線治療を受けた癌患者との関わりから—。看護科学研究学会第2回学術集会集録, 20—25, 2002.

## 〔その他〕

4. 山本利江, 小川純子：看護実践を他者に語ることを通して, ふりかえりの限界を超える試み—多剤耐性肺結核を合併した透析患者への看護過程—。千葉看護学会第8回学術集会集録, 20—21, 2002.
5. 山本利江, 和住淑子, 青木好美, 河部房子, 高橋幸子, 田中裕二：看護技術教育におけるマルチメディア教材の開発, 千葉大学オープンリサーチ2002, 25, 2002.
6. 薄井坦子, 三瓶眞貴子, 山岸仁美, 栗原保子, 小野美奈子, 赤星誠, 阿部恵子, 寺島久美, リウ真田知子, 島川直子, 稲田夏希, 嘉手苺英子, 山本利江, 新田なつ子, 中野榮子：宮崎県立看護大学における教育課程の構築とその評価。宮崎県立看護大学研究紀要, 3(1), 1—9, 2002.
7. 薄井坦子, 嘉手苺英子, 山本利江, 山岸仁美, 新田なつ子, 寺島久美：看護基礎教育における教育課程の評価に関する研究 分担1 教育課程構築に至る研究過程の分析, 宮崎県立看護大学研究紀要, 3(1), 10—17, 2002.
8. 斉藤しのぶ, 和住淑子, 青木好美, 河部房子, 永田亜希子, 野々村みち子, 徳本弘子, 山本利江：『思索への示唆』献辞から人間の発展過程に関する見方を探る試み。ナイチンゲール研究第8号, 41—52, 2002.
9. 斉藤しのぶ, 和住淑子, 青木好美, 河部房子, 中川亜希子, 尾高みち子, 徳本弘子, 山本利江：F. ナイチンゲールにおける人間の発展過程に関する一貫した見方—『思索への示唆』献辞より—。総合看護, 37(1), 17—28, 2002.

## 〔研究状況〕

当教育研究分野では理論看護学の立場からナイチンゲール看護論を学問的に追究し, その継承・発展を目指した教育・研究活動を一貫して行っている。

現在, 理論看護学の立場から「振り返り (reflection)」という看護職者の認知過程に関わる研究を継続中である。和住は, 看護理論を意識的に活用して自己の実習体験を振り返った看護学生の事例をもとに, 看護職者としての専門的思考を発展させる上での看護理論の有用性を検討し発表した (1)。青木らは, ターミナルケアに関わる看護師らと共に, ナイチンゲール看護論を活用して看護実践の振り返りと評価を行い, 根治できない段階の癌患者の生命と生活を支える上で要求される看護職者の専門的視点を浮き彫りにした (3)。山本は, 看護実践を他者に語ることで, 看護実践に対する自己の認知過程にどのような変化が生じるのかを実証的に明らかにすることを通して, 「振り返り」という認知過程の本質的な構造と, その過程において他者が果たす役割について検討した (4)。

山本は, ナイチンゲール看護論を継承発展させ一貫した理論のもとに組み立てられた教育課程を掲げた新設看護大学が, 大学の完成年度を迎え, 教育課程を自己点検・評価するプロジェクトに参加した。(6) (7) はその成果の一部である。(6) は, 看護職者の究極的な実践能力は, 一人ひとりの状況対応能力

であると考え、学生一人ひとりの頭脳に〈看護する心と力〉の源泉となるものを学生自らつくりあげていくために、〈学問の論理〉と〈教育の論理〉を追究しつつ統合した、仮説実験的な教育課程を構築した過程と、その教育課程の構造を論述したものである。(7)は、看護基礎教育の変革の転換点となった史的事実をたどりつつ、看護学の自立を追究し続けた先達が、看護理論の構築と看護基本技術の構造分析に至る看護学の史的発達過程を論じ、この歴史性を背景に、千葉大学看護学部基礎看護学講座において〈看護学の論理〉を基盤にして創出された、〈看護観とその表現技術の体系的教育実践〉について論述したものである。

看護技術教育に関しては、当教育研究分野が独自に開発、検証を重ねてきた教材ビデオのマルチメディア化を目指して、市販のビデオ教材との比較検討を行い、その成果の一端をオープンリサーチにて紹介した(5)。

ナイチンゲールの著作から認識を探る研究も継続中である。昨年に引き続き『思索への示唆』を分析し、ナイチンゲールの人間観の一端を明らかにした(2)(8)(9)。今後も分析を継続していく予定である。

## 看護教育学教育研究分野

### 〔原著〕

1. 舟島なをみ, 定廣和香子, 亀岡智美他: 看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度の開発—質的帰納的研究成果を基盤として—. 千大看紀要, 24, 9-14, 2002.
2. 鈴木恵子, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 在宅看護場面における看護職の行動に関する研究—保健婦とクライアントの相互行為に焦点を当てて—. 看護教育学研究, 11(1), 12-25, 2002.
3. 横山京子, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 短期大学卒業直後に看護学士課程へ編入学した学生の学習経験—短期大学を卒業した編入学生理解のための指標の探究—. 看護教育学研究, 11(1), 26-39, 2002.
4. 三浦弘恵, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 看護職者の学習ニーズに関する研究—病院に就業する看護職者に焦点を当てて—. 看護教育学研究, 11(1), 40-53, 2002.
5. 永野光子, 舟島なをみ: 臨床看護婦・士の自己教育力と看護婦・士特性との関係. 順天堂医療短期大学紀要, 13, 1-10, 2002.
6. 舟島なをみ, 定廣和香子: わが国における看護継続教育研究の動向. 看護研究, 35(6), 3-14, 2002.
7. 定廣和香子, 山下暢子: 看護問題対応行動自己評価尺度 (OPSN) の開発. 看護研究, 35(6), 15-26, 2002.
8. 村上みち子, 舟島なをみ: 看護学教員のロールモデル行動に関する研究—ファカルティ・ディベロップメントの指標の探求—. 看護研究, 35(6), 35-46, 2002.

### 〔学会発表抄録〕

9. 三浦弘恵, 定廣和香子, 舟島なをみ: 病院に就業する臨床経験2年未満の看護職者の学習ニーズ. 第20回千葉県看護研究学会集録, 76-78, 2002.
10. Kameoka T, Sadahiro W, Funashima N: An Analysis of the Trends in Qualitative Research in Nursing Education in Japan: From 1994 To 1998. The 8th International Qualitative Health Research Conference Program, 237, 2002.
11. Yokoyama K, Funashima N, Sadahiro W, et al.: Exploration of Problems Which Transferred Students in Baccalaureate Nursing Program Face in Japan. The 8th International Qualitative Health Research Conference Program, 237-238, 2002.
12. Suzuki M, Sadahiro W, Funashima N, et al.: The Problems Hospital Nurses Faced in Continuing Nursing Occupation. The 8th International Qualitative Health Research Conference Program, 95, 2002.
13. Miura H, Sadahiro W, Funashima N, et al.: Hospital-Based Nurses' Learning Needs and Their Situation of Nursing Skill Acquisition. The 8th International Qualitative Health Research Conference Program, 99, 2002.

14. 松田安弘, 定廣和香子, 舟島なをみ: 看護学教員のロールモデル行動に対する自己評価の現状. 日本看護学教育学会第12回学術集会講演集, 143, 2002.
15. 本郷久美子, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 看護学教員のロールモデル行動に関係する要因. 日本看護学教育学会第12回学術集会講演集, 144, 2002.
16. 本郷久美子, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 教員の看護に対する価値づけと看護学実習におけるロールモデル行動の両者に関係する特性の探索. 第33回日看会抄録集 (看護教育), 7, 2002.
17. 松田安弘, 定廣和香子, 舟島なをみ: 看護師の看護問題対応行動に関係する特性の探索—看護職養成教育の課題検討に向けて—. 第33回日看会抄録集 (看護教育), 49, 2002.
18. 横山京子, 定廣和香子, 舟島なをみ: 看護学教育研究の動向—小児看護学に焦点を当てて—. 第33回日看会抄録集 (看護教育), 71, 2002.
19. 三浦弘恵, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 看護問題対応行動自己評価尺度 (OPSN) の開発—信頼性・妥当性の検証—. 看護教育学研究, 11(2), 6-7, 2002.
20. 山下暢子, 舟島なをみ: 看護学実習における学生の行動に関する研究. 看護教育学研究, 11(2), 10-11, 2002.
21. 松田安弘, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 男性看護師の看護職選択の経緯と理由—看護職養成教育の課題検討に向けて—. China-Japan Medical Conference 2002 and the 8th China-Japan Nursing Conference Abstracts Book, 53-55, 2002.
22. 定廣和香子, 舟島なをみ, 山下暢子他: 日本における看護学教育研究の動向—看護継続教育に焦点を当てて—. China-Japan Medical Conference 2002 and the 8th China-Japan Nursing Conference Abstracts Book, 66-68, 2002.
23. 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 看護学実習に関する研究の現状と課題—学生を対象とした研究に焦点をあてて—. 第22回日看科会講演集, 94, 2002.
24. 三浦弘恵, 定廣和香子, 舟島なをみ他: 病院に就業する卒後3年未満の看護職者の学習ニーズ—看護基礎教育課程との関連に焦点を当てて—. 第22回日看科会講演集, 191, 2002.
25. 定廣和香子, 舟島なをみ, 廣田登志子他: 看護学実習における教授活動に関する研究—教授活動の質と教員特性との関係—. 第22回日看科会講演集, 201, 2002.

#### 〔その他〕

26. 舟島なをみ: 看護継続教育論—3領域への研究的アプローチ—. 看護研究, 35(6), 2, 2002.

#### 〔単行書〕

27. 舟島なをみ: 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程—. 第1版, 医学書院, 2002.

#### 〔研究状況〕

当教育研究分野は, 以下の9領域に寄与する研究活動を展開した.

①看護教育学研究の体系化: 舟島は, 当研究分野における研究成果を基盤として確立した看護教育学研究の体系と共に理論開発の方法論を著した「看護教育学研究」(27)を出版した.

②看護学教育研究の動向: わが国の看護学教育研究における質的研究(10), 小児看護学研究(18), 実習における学生を対象とした研究(23)の動向を解明し, 課題を検討した.

③教授活動の質向上: 看護学実習における教授活動の質と教員特性との関係を解明した(25).

④看護学教員のロールモデル行動の質向上: 看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度を開発(1)し, 教員の自己評価の現状(14), ロールモデル行動に関係する要因(15)を解明した. また, 看護学実習におけるロールモデル行動と看護に対する価値づけの両者に関係する特性を解明(16)し, ファカルティ・ディベロップメントに向けた指標を探索(8)した.

⑤看護学生の理解: 看護学実習における学生の行動を説明する概念(20), 短期大学卒業直後に看護学士課程へ編入学した学生の学習経験を説明する概念(3)を創出した. また, 学士課程において編入学生が直面する問題(11)を解明した.

⑥看護における少数者の理解: 男性看護師の看護職選択の経緯と理由(21)を解明した.

⑦看護の専門職性の理解と質向上：在宅看護場面における看護職の行動を説明する概念を創出（2）すると共に、看護問題対応行動自己評価尺度（OPSN）を開発（7）し、その信頼性・妥当性を検証した（19）。また、看護問題対応行動と看護師特性との関係（17）を解明した。

⑧看護師の発達支援：臨床看護師の自己教育力と個人特性との関係（5）、病院に就業する看護師が直面する問題（12）を解明した。

⑨看護継続教育の発展：わが国における看護継続教育研究の領域（6, 22）と共に、病院に就業する看護職者の学習ニードに関する研究（4）を基盤とした臨床経験2年未満の看護職者の学習ニード（9）、看護技能修得状況との関係（13）、卒後3年未満の看護職者に焦点を当てて看護基礎教育課程との関連（24）を解明した。また、舟島は看護継続教育論として論著（26）を著した。

## 機能・代謝学教育研究分野

### 〔学会発表抄録〕

- 1) 山田重行：全身清拭時の清拭方向が皮膚血流に及ぼす影響に関する生体顕微鏡的検討，日衛誌，57(1)，193，2002.
- 2) 田中裕二，佐伯由香：温罨法および冷罨法による疼痛緩和効果の科学的検証—体性感覚誘発電位を指標として，日本看護技術学会第1回学術集会講演抄録集，56-57，2002.
- 3) 佐伯由香，田中裕二：疼痛緩和における音楽・芳香療法の効果，第22回日本看護科学学会学術集会講演集，91，2002.
- 4) 楊箸隆哉，坂口けさみ，山崎章恵，柳沢節子，田中裕二：ポリエステル・マットレスとエア・マットレスにおける体圧分布の比較—若年者と高齢者を対象として—，第22回日本看護科学学会学術集会講演集，470，2002.
- 5) 佐藤暢哉，酒田英夫，田中裕二，泰羅雅登：サル of 仮想空間におけるナビゲーション．第25回日本神経科学大会プログラム・抄録集，258，2002.
- 6) Sato, N., Sakata, H., Tanaka, Y. and Taira, M.: Neuronal activity in the mesial parietal cortex of the monkey during navigation task in virtual space. Program No. 282. 13. 2002 Abstract Viewer/Itinerary Planner. Washington, DC: Society for Neuroscience 32th Annual Meeting, 2002. Online

### 〔単行書〕

- 7) 田中裕二：第5課 フィジカルアセスメントの方法．渡辺裕子（監修），家族看護を基盤とした在宅看護論Ⅱ（実践編）．第1版第1刷，（株）日本看護協会出版会，129-156，2002.

### 〔研究状況〕

山田（教授）と茅野（助手）は主として微小循環生理学の基礎看護学への応用を目途に研究している（1）。進行中のテーマは，①一酸化窒素による褥瘡予防の実験的研究，②看護介入のリラクゼーション効果の量的測定とその看護への応用，③Castor oilの皮下脂肪代謝に及ぼす生体顕微鏡的研究，④痴呆性老人の覚醒レベルに及ぼす看護介入の効果，⑤マイナス空気イオンの自律神経系に及ぼす影響などであり，大学院生や卒研生もこれに参加している。

田中（助教授）は看護技術の科学的な検証に基づいた研究成果を発表した（2-4, 7）。また，道順記憶に関係した高次脳機能（認知地図）についての電気生理学的な研究を継続している（5, 6）。新しい研究テーマとして，高次脳機能障害患者，特に意識障害患者に対する正中神経刺激の効果や脳低体温療法施行時のバイタルサインの変化と看護援助技術に関する研究に取り組んでいる。

## 病態学教育研究分野

### 〔原 著〕

1. 岡田忍, 西尾淳子, 木幡暁子, 福元恵, 丹下真希, 鈴木明子, 吉澤花子: ネブライザーにおける使用液とその保存条件およびネブライザー本体の管理方法に関する実験的研究. 千大看紀要 24, 31—36, 2002.

### 〔学会発表抄録〕

2. 岡田忍, 小川俊子, 西尾淳子, 鈴木明子, 小池和子: 訪問入浴サービスにおける感染防止対策. 環境感染, 17, 105, 2002.
3. 鈴木明子, 久保悦子, 久保勢津子, 古山信明, 吉田千文, 西尾淳子, 岡田忍, 菅野治重: 院内感染対策における病院清掃業務の改善. 環境感染, 17, 110, 2002.
4. 斉藤静子, 西尾淳子, 鈴木明子, 岡田忍: 低栄養状態がX線照射による免疫系臓器の傷害に及ぼす影響について. 第6回北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集, 123, 2002.
5. 岡田忍: 基礎教育と臨床現場の連携—専門基礎科目の教官自身が臨床現場での研修経験を持つことの意義. 千葉看会第8回学術集会抄録集, 22—23, 2002.

### 〔研究状況〕

本研究分野では、感染看護に関連した微生物伝播の状況把握、伝播拡大の防止の立場で研究を進めている。

昨年度第5回北日本看護学会学術集会において発表したネブライザーの微生物学的汚染に関する実験的研究については、論文としてまとめた(1)。院内感染の防止については、鈴木が千葉大学医学部附属病院ICTの一員として継続して活動を行っており、清掃業務の改善に取り組んだ成果を、日本環境感染学会第17回総会で発表した(3)。

研究の対象を在宅医療における感染防止へと拡大し、特に利用者と密接に接触し、浴槽などの媒体が存在する訪問入浴サービスの感染防止対策について検討している。岡田らは入浴後の浴槽などの消毒や介助者の手洗いについて微生物学的な評価を行い、日本環境感染学会第17回総会で発表した(2)。現在は、職員鼻腔からの分離株と利用者褥創からの分離株について交差感染の可能性を検討するとともに、千葉県内の訪問入浴サービスの感染防止対策の実態に関する調査を実施し、結果をまとめているところである。

また、感染防止には感染を受ける宿主側の要因も重要であり、この視点に立った研究にも着手しており、宿主の栄養状態がX線照射による免疫系臓器の傷害やその回復に及ぼす影響について検討し、第6回北日本看護学会において発表を行った(4)。現在は、ステロイド療法に及ぼす栄養状態の影響について検討中である。

学部における教育活動としては、昨年度より病態学Ⅱの実習の中に医療の現場で問題になっている薬剤耐性菌を視覚的に認識してもらうために薬剤耐性試験を、また医療従事者として自己の免疫状態についての意識を高める目的で、自己の風疹抗体の有無をELISA法により測定するという実習を始めているが、特に風疹抗体価測定実習については、実習後の質問紙調査により、その教育的な効果の数量化を試みている。

この他、岡田は臨床現場での研修を教育に活用し、これが学生に専門基礎科目への興味を持たせるために有効であったという経験についてまとめ、千葉看護学会で発表した(5)。

## 母性看護学教育研究分野

### 〔原 著〕

1. 大月恵理子, 森恵美: 第2子出生に伴う家族の適応過程, 日本母性看護学会, 2(2), 31—40, 2002.
2. 大月恵理子, 森恵美: 第2子出生前後の第1子の反応と家族の認知, 母性衛生, 43(2), 332—339, 2002.

〔学会発表抄録〕

3. Saeki, A., Ishii K., Otsuki, E., Mori, E., et. al.: Midwifery Practice and Factors for the Decision-Making of Prenatal Diagnosis, 26th Triennial Congress of the ICM Proceedings CD-ROM, 2002.
4. 西野由利子, 森恵美: 妊婦の体重コントロールのためのセルフケア行動を動機づける要因, 第43回日本母性衛生学会, 211, 2002.
5. 望月良美, 泉名節子, 井上勝也: ナースコールに関する患者の認識について, 第33回日看会抄録(看護管理), 62, 2002.

〔その他〕

6. 森恵美: 助産師教育における臨地実習指導の課題と展望, シンポジウム「これからの助産師教育」, 第43回日本母性衛生学会, 55, 2002.

〔研究状況〕

本教育研究分野では, Reproductive Healthに関連した健康問題をもつ女性や, 妊娠・分娩・産褥期などにある女性の健康や母性性の発達を促す看護方法に関する研究を行っている。家族育成期の女性とその重要なパートナーである夫との関係, 家族についても調査, 検討を重ねている。

大月, 森は第2子出生に伴い家族に生ずる第1子の反応と生活の変化に関する質的データを妊娠中から産後3~4ヶ月にかけて縦断的に収集し, 第2子出生後の家族の適応過程の状況と, それが円滑に進むための援助の方向性を見出し, 原著にまとめた(1, 2)。

以前から取り組んでいた「出生前診断における意思決定プロセスにかかわる看護に関する研究」の一部をウィーンで行われたICMで報告した(3)。望月はナースコールへの看護職者の対応を観察し, 同時に看護職者および患者の認識を質問した結果を分析し, ナースコールに対する患者の認識を明らかにし発表した(5)。また, 森は第43回日本母性衛生学会のシンポジウム「これからの助産師教育」において, 助産師教育における臨地実習指導の課題と展望と題して発表した(6)。

小児看護学教育研究分野

〔原 著〕

1. 中村伸枝, 兼松百合子, 遠藤巴子, 佐藤浩一, 宮本茂樹, 野田弘昌, 大西尚志, 今田進, 佐々木望: 小学校高学年から中学生の生活の満足度(QOL) 質問紙の検討. 小児保健研究, 61(6), 806—813, 2002.
2. 中村伸枝, 石川紀子, 武田淳子, 内田雅代, 遠藤巴子, 兼松百合子: 学童の肥満と日常生活習慣についての親のとらえ方—学童の肥満を気がかりに挙げている親と, 気がかりに挙げていない親を比較して—. 千大看紀要, 24, 1—7, 2002.
3. 小川純子: 小児がんの子どもへの処置に対する主体性を高める看護援助, 千葉看会誌, 8(1), 8—14, 2002.
4. 伊庭久江, 石川紀子, 丸光恵, 林有香, 富岡晶子, 内田雅代: 子ども虐待に対する看護職の意識調査—保育職と比較して—, 千大看紀要, 24, 23—29, 2002.

〔学会発表〕

5. 中村伸枝, 武田淳子, 遠藤巴子, 石川紀子, 伊庭久江, 林有香, 兼松百合子: 学童と親を対象とした日常生活習慣改善の試みと検討—看護師と養護教諭の連携による試み—. 第49回日本小児保健学会プログラム講演集, 566, 2002.
6. 武田淳子, 中村伸枝, 遠藤巴子, 石川紀子, 伊庭久江, 林有香, 兼松百合子: 養護教諭との連携による学童と親を対象とした日常生活習慣改善の試み. 千葉看会第8回学術集會集録, 11, 2002.
7. 小川純子: 白血病の子どもへの痛みを伴う処置に対する姿勢の変化—学童前期の子どもへの処置に対する主体性を高める看護援助を行って—. 日本小児看護学会第12回学術集會講演集, 146—147, 2002.

8. 小川純子, 中村伸枝: 痛みを伴う処置を受ける小児がんの子どもに対するノートパソコンの挿し絵を用いたプリパレーションの検討. 千葉看会第8回学術集会抄録集, 10, 2002.
9. 小川純子: 小児がんの子どもへの処置に対する主体性を高める看護援助—ノートパソコンの画像を用いた視覚的情報提供を行って—. 小児がん, 39(3), 455, 2002.
10. 伊庭久江, 林有香, 小川純子, 中村伸枝: 医療機関における看護職の育児支援. 第13回日本小児外科QOL研究会抄録集, 42, 2002.
11. 銭淑君, 中村伸枝: 思春期1型糖尿病患者のセルフケアと親子関係についての研究. 第22回日看科会学術集会講演集, 244, 2002.

〔その他〕

12. 中村伸枝: 小児糖尿病の看護から生活習慣予防へ. 千葉看会誌, 8(2), 25—31, 2002.
13. 中村伸枝, 兼松百合子, 出野慶子, 徳田友, 内田雅代, 今野美紀, 谷洋江, 宮本茂樹: 1型糖尿病の年少児・発症後間もない児と家族を対象としたファミリーキャンプの活動と看護師の役割. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 6(2), 141—146, 2002.
14. 中村伸枝: 小児看護における糖尿病遺伝医療の現状と課題. 第7回日本糖尿病教育・看護学会学術集会交流集会2 糖尿病遺伝医療と看護, 50, 2002.
15. 中村伸枝, 吉本照子: 〈特集〉看護学教育における国際交流の実態と課題 看護教育国際協力会議における討議から. Quality Nursing, 8(6), 9—16, 2002.
16. 石川紀子, 林有香, 伊庭久江, 丸光恵, 内田雅代: 看護・保育職を対象とした子ども虐待の早期発見・早期対応を目指した教育セミナーの計画, 実施, 評価について. 千大看紀要, 24, 47—51, 2002.
17. 中村伸枝: 小児糖尿病患者の成長を支える看護の連携・継続. 平成14年度千葉大学公開講座, 4—5, 2002.

〔単行書〕

18. 中村伸枝: 第3章小児の食生活と栄養, 第4章心身の健康増進の意義とその実践. 保育士(保母)試験合格講座第5巻小児保健, 38—43, 44—47, 2002.

〔研究状況〕

本教育研究分野では, 障害や慢性疾患をもつ子どもと家族について継続的な看護を実践すると共に, 研究を行っている. 本年度は, 小川が助手に加わり, 小児がんの子どもへの処置に対する主体性を高める看護援助に関する研究が発表された(3, 7—9).

中村は, 千葉看護学会第8回学術集会の学会長をつとめ(12), 小児糖尿病患者と家族への看護・研究を継続すると共に(11, 13, 14, 17), 平成13年度より厚生労働省科学研究費を受けた「糖尿病および生活習慣病をもつ子どものQOL改善のための研究」の研究分担者として研究成果を発表した(1). また, 伊庭, 林らと共に平成12~14年度文部科学省科学研究費を受けた「学童と親を対象とした日常生活習慣改善プログラムの試作と検討」を行い, 研究成果を発表した(2, 5, 6). 伊庭は, 昨年まで行っていた「看護・保育職が行う子ども虐待予防・早期発見・早期対応方法に関する研究」の成果を論文にまとめた(4). また, 林は, 平成13年度千葉大学重点経費事業萌芽的研究助成を受けた「育児支援」の研究を伊庭, 小川と共に実施し, 成果を発表すると共に(10), 新たに文部科学省科学研究費を受けて「医療ケアを必要とする小児の健康管理に関する学校, 家庭, 医療機関の連携促進と看護の役割」に関する研究を推進している.

成人看護学教育研究分野

〔原著〕

1. 佐藤まゆみ, 佐藤禮子: 乳房温存療法をうける乳がん患者の術後1年間の心理的变化. 千葉看会誌, 8(1), 47—54, 2002.

2. 太田節子, 佐藤禮子: 観血的治療を受ける高齢大腿骨頸部骨折患者の回復過程と看護援助に関する研究. 千葉看会誌, 8(1), 30—39, 2002.
3. 濱田由香, 佐藤禮子: 終末期がん患者の希望に関する研究. 日本がん看護学会誌, 16(2), 15—25, 2002.
4. 浅野美知恵, 佐藤禮子: がん手術後5年以上経過の患者とその家族員の社会復帰過程におけるがん罹患の意味. 千葉看会誌, 8(2), 9—15, 2002.

#### [学会発表抄録]

5. 佐藤まゆみ, 小西美ゆき, 菅原聡美, 増島麻里子, 佐藤禮子, 柴田純子, 小関真紀, 布施恵子, 奥朋子, 水野知穂: がん患者の主体的療養を支援する上での外来看護の問題と解決への取り組み. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 134, 2002.
6. 菅原聡美, 小澤桂子, 高橋晴美, 熊谷靖代: がん専門病院における研究結果の活用に関連する要因. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 158, 2002.
7. 熊谷靖代, 小澤桂子, 高橋晴美, 菅原聡美: がん専門病院における研究結果の活用の実態. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 159, 2002.
8. 高橋晴美, 小澤桂子, 熊谷靖代, 菅原聡美: 臨床における研究結果の活用状況とその関連要因—がん専門病院と一般総合病院の比較—. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 160, 2002.
9. 高山京子, 佐藤禮子, 菅原聡美: 抗がん剤の臨床試験に参加する肺がん患者の体験と看護援助に関する研究 その1: 抗がん剤の臨床試験に参加する肺がん患者の体験の意味. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 176, 2002.
10. 高山京子, 佐藤禮子, 菅原聡美: 抗がん剤の臨床試験に参加する肺がん患者の体験と看護援助に関する研究 その2: 抗がん剤の臨床試験に参加する肺がん患者を支える看護援助. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 177, 2002.
11. 戸谷美紀, 佐藤禮子, 増島麻里子: 終末期を自宅で過ごすがん患者と家族のケアリングを促進する看護援助. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 128, 2002.
12. 志水友加, 佐藤禮子, 小西美ゆき: 終末期がん患者の倦怠感の表出と看護援助. 日本がん看護学会誌, 16 (特別号), 142, 2002.
13. 前田佐知子, 佐藤禮子, 佐藤まゆみ: 開頭手術を受ける患者の家族の周手術期の体験と看護援助. 第33回日看会抄録集 (成人看護I), 15, 2002.
14. 佐々木里美, 佐藤まゆみ, 佐藤禮子: スタッフ看護師の実習指導を通しての学びと困難・負担感. 第33回日看会抄録集 (看護教育), 8, 2002.
15. 牛尾裕子, 大室律子, 吉本照子, 本田彰子, 佐藤禮子: 市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究. 千葉看護学会第8回学術集會集録, 15, 2002.
16. 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代, 佐藤禮子: 看護系大学卒業者の活用・育成に対する看護師長の意識. 第22回日看科会講演集, 169, 2002.
17. 岡本明美, 佐藤禮子, 菅原聡美: 手術を受けた胃がん患者の職場復帰における課題と主体的取り組み. 第22回日看科会講演集, 270, 2002.
18. 吉野明子, 佐藤禮子, 小西美ゆき: 手術を受けたがん患者のヘルスプロモーションに関する研究. 第22回日看科会講演集, 279, 2002.
19. 前田佐知子, 佐藤禮子, 佐藤まゆみ: 開頭手術を受ける患者の周手術期の体験と看護援助. 第22回日看科会講演集, 250, 2002.
20. 菊内由貴, 佐藤禮子: 身体内に腫瘍を抱える肺がん患者の自己概念に関する研究. 第22回日看科会講演集, 280, 2002.
21. 奥村美奈子, 佐藤禮子, 小西美ゆき: 人工弁置換術を受けた患者が退院後抱える問題と看護援助に関する研究. 第22回日看科会講演集, 251, 2002.
22. 太田節子, 佐藤禮子: 観血的治療を受ける高齢大腿骨頸部骨折患者の身体的特徴と回復への援助. 第22回日看科会講演集, 347, 2002.
23. 櫻井智穂子, 佐藤禮子, 増島麻里子: 終末期のがん患者と家族の在宅療養に関わる意思決定. 第22回



日看科会講演集, 273, 2002.

24. 早苗雅子, 佐藤禮子: 死にゆくがん患者と家族員との相互作用. 第22回日看科会講演集, 267, 2002.
25. Asano, M & Sato, R.: Role of family members in supporting postoperative rehabilitation for Japanese cancer patients. 2<sup>ND</sup> ICN International Nurse Practitioner, Advanced Practice Nursing Network Conference, 116, 2002.

〔報告書〕

26. 佐藤禮子, 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代: 看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護管理者の意識. 千葉大学教育改善推進事業調査報告書, 2002.
27. 佐藤禮子, 大室律子, 本田彰子, 吉本照子, 牛尾裕子: 市町村保健師の職場内における現任教育の現状. 千葉大学教育改善推進事業調査報告書, 2002.

〔その他〕

28. 佐藤禮子: 学士課程の看護学生が獲得すべき能力とは何か～備えるべき看護学のコア教育内容とは. 大学と学生, 453, 8-15, 2002.
29. 佐藤禮子: がん罹患者に対するがん看護の問題と将来展望. 日本がん看護学会誌, 16(2), 89-97, 2002.
30. 佐藤まゆみ: 大学と臨地実習施設との共同研究を通して得られたもの及び困難点—大学側から参加している者の立場から—. 千葉看会誌, 8(2), 35-37, 2002.
31. 小西美ゆき, 佐藤まゆみ, 佐藤禮子, 菅原聡美, 増島麻里子, 水野照美, 青山美貴, 濱田由香, 猪俣桜子: 外来に通院するがん患者の療養生活上のニーズの起因. 千大看紀要, 24, 41-45, 2002.

〔研究状況〕

成人看護学教育研究分野では, がん看護, 周手術期看護, 終末期看護に関する研究を継続している。

がん看護については, 平成12年度より「癌患者の主体的療養を支援するための外来看護モデルの構築に関する研究」に継続して取り組んでいる。本年度は, 外来看護モデルの構築の基盤として, 外来患者のニーズの起因を明らかにするとともに, 現状の外来看護の問題と解決の取り組みを明らかにした(5, 31)。また, 様々な時期にあるがん患者や, 様々な治療を受けるがん患者に特徴的な問題と看護援助について多角的に分析した研究(1, 4, 9, 10, 17, 18)や, 腫瘍を身体に抱えて生きるという視点から自己概念を明らかにした研究成果を発表した(20)。さらに佐藤は, がん罹患者に対するがん看護の問題と将来展望について基調講演を行った(29)。また, 菅原らは, がん専門病院における研究結果の看護への活用の実態や要因を明らかにした(6, 7, 8)。

周手術期看護については, 患者および家族の周手術期における体験や退院後に抱える問題を明らかにし, 看護援助を導く研究成果を国内外に発表した(2, 13, 19, 21, 22, 25)。

終末期看護については, 在宅療養に関わる患者と家族の意思決定(23), 在宅における患者と家族のケアリングや相互作用(11, 24), 患者の希望(3)や倦怠感の表出(12)などに着目し, 看護援助を明らかにする研究成果を発表した。

その他, 佐藤は, 学士課程の看護学生が獲得すべき能力について看護学のコア教育内容の視点から論説した(28)。さらに佐藤らは, 看護系大学卒業者の活用・育成に対する看護管理者の意識についての研究成果を発表した(16, 26)。また, 佐藤(ま)は, 大学と臨地実習施設との共同研究を通して得られたもの及び困難点についてシンポジウムを行った(30)。

老人看護学教育研究分野

〔原著〕

- 1) 松田典子, 湯浅美千代, 野口美和子: 入院・入所している難聴高齢者の難聴に由来する思いと看護援助. 千葉看会誌, 8(2), 16-22, 2002.

**〔学会発表抄録〕**

- 2) 大下愛, 湯浅美千代, 野口美和子: 介護老人保健施設入所の効果—入所者のとらえ方と施設職員のとらえ方の比較から. 第33回日看会抄録集 (老年看護), 108, 2002.
- 3) 福山由美子, 湯浅美千代, 佐瀬真粧美, 野口美和子: 高齢入院患者のケアを通して看護・介護職者にもたらされる効果. 千葉看会第8回学術集會集録, 32—33, 2002.
- 4) 福山由美子, 湯浅美千代, 佐瀬真粧美, 野口美和子: 高齢入院患者にもたらされる「ケアの効果」—看護・介護者が自覚しえないものを分析して—. 日本老年看護学会第7回学術集會抄録, 169, 2002.
- 5) 根本敬子, 湯浅美千代, 佐瀬真粧美: 入院中の患者の体験と看護記録への記載内容, 看護師が把握していたことの相違の実態—退院後もセルフケアを必要とする事例の分析を通して—. 千葉看会第8回学術集會集録, 13, 2002.
- 6) 山本明美, 湯浅美千代, 野口美和子: 血液透析患者の対処の変化—患者が感じた制限や調整に対する対処について—. 第33回日看会抄録集 (成人看護Ⅱ), 40, 2002.
- 7) 金原陽子, 清水安子, 湯浅美千代, 野口美和子: 糖尿病という病名のカミングアウトの実態, 第33回日看会抄録集 (成人看護Ⅱ), 186, 2002.
- 8) 津野祥子, 清水安子, 湯浅美千代, 野口美和子: 糖尿病患者の自己管理実践と入院体験から生まれる快体験の変化とその要因, 第33回日看会抄録集 (成人看護Ⅱ), 187, 2002.
- 9) 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代, 佐藤禮子: 看護系大学卒業者の活用・育成に対する看護師長の意識. 第22回日看科会学術集會講演集, 169, 2002.
- 10) 湯浅美千代, 酒井郁子, 渡辺洋子, 馬場寛子, 吉井芳美: 大学教員と病院管理者の連携による研修を実施して. 千葉看会第8回学術集會集録, 14, 2002.
- 11) 酒井郁子, 湯浅美千代, 馬場寛子, 渡辺洋子, 吉井芳美: 中堅看護師研修プログラムの効果の検討—自己教育力と職務満足に焦点をあてて—. 第33回日看会抄録集 (看護管理), 134, 2002.

**〔報告書〕**

- 12) 湯浅美千代: 痴呆症状を有する患者の日常生活能力の発見とその効果. 平成12年度ジェロントロジー研究報告No.5, 日本興亜福祉財団, 22—31, 2002.
- 13) 佐藤禮子, 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代: 看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護管理者の意識. 千葉大学看護学部研究班 (平成14年度), 2002.

**〔その他〕**

- 14) 周宇彤, 湯浅美千代, 野口美和子: 脳卒中患者への看護援助—自我発達を促進する視点から—. Quality Nursing, 8(3), 229—235, 2002.
- 15) 湯浅美千代, 野口美和子, 佐瀬真粧美, 桑田美代子, 鈴木智子: 痴呆症状を有する患者の日常生活能力を発見する方法, 第6回高齢者介護・看護・医療フォーラムプログラム・抄録, p. 12, 2002.
- 16) 酒井郁子, 湯浅美千代, 吉本照子, 野口美和子: 大学教員がとらえている学習者としての看護実践者の特徴と継続教育を行う上での信念. 千大看紀要, 57—61, 2002.

**〔単行書〕**

- 17) 湯浅美千代: 第6課栄養の保持, 渡辺裕子 (監修), 家族看護学を基盤とした在宅看護論Ⅱ【実践編】. 初版, 日本看護協会出版会, 157—168, 2002.
- 18) 湯浅美千代: 第10課コミュニケーションを援助する, 渡辺裕子 (監修), 家族看護学を基盤とした在宅看護論Ⅱ【実践編】. 初版, 日本看護協会出版会, 214—229, 2002.
- 19) 湯浅美千代: 第2章老年看護技術各論Ⅱ. 食事のアセスメントと援助技術, 中島紀恵子 (監修), 実践看護技術学習支援テキスト老年看護学. 初版, 日本看護協会出版会, 59—83, 2002.
- 20) 湯浅美千代, 鈴木智子: 第3章事例学習—事例からみる老年看護の展開Ⅰ. 食事に対する援助の事例, 中島紀恵子 (監修), 実践看護技術学習支援テキスト老年看護学. 初版, 日本看護協会出版会, 191—199, 2002.

## 〔研究状況〕

当教育研究分野では、慢性病患者の看護と老人看護を2本の柱として教育・研究を行っている。

慢性病患者の看護では、糖尿病患者会のサポートや千葉糖尿病スタッフ研究会の運営に関わり、研究・実践の基盤を作っている。また、千葉県内の病院の糖尿病専門外来において昨年度の調査をもとに、新たな看護実践に研究的に取り組んでいるところである。さらに、今年度より、地域における糖尿病看護の新しい役割・活動を探るため千葉市内の保健センターでの糖尿病教室の現状を把握するなどの活動を行っている。これらの活動の中で慢性病患者の看護に関しては、糖尿病という病名の影響に関する研究(7)、糖尿病の教育入院に関する研究(8)、血液透析患者の対処に関する研究(6)、脳卒中患者の看護に関する研究(14)について発表している。

老人看護に関して今年度は、千葉市内の特別養護老人ホーム、介護老人保健施設(計28施設)を訪問して施設管理者にインタビューし、施設ケアの現在の課題を把握するとともに施設との連携を深める試みを行った。また、研究では、難聴高齢者のケア(1)、痴呆患者のケア方法(12, 15)、高齢者に行った「ケアの効果」を多面的にとらえる試み(3, 4)、施設ケア(2)についてまとめ、発表した。また湯浅は、老人看護に関連したテキストを執筆した(17-20)。

その他、看護管理・教育に関連する内容として、看護記録に関する研究(5)、継続教育のための基礎的研究(9, 13, 16)ならびに卒後の院内研修プログラムの開発、評価研究(10, 11)を行った。

今年度正木は、平成14年度教育改善推進費(学長裁量経費)を受け、看護実践能力の到達度評価方法に関する検討ワーキングを、8大学9名のメンバーで行っている。また湯浅は、文部科学省科学研究費補助金(一般研究B(1))による「介護保険施設における痴呆症をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入と理論化」(研究代表者野口美和子)の共同研究者の一人として調査研究を行っている。清水は、文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)を受け、「大学病院における慢性疾患専門外来の患者指導の実態と看護師の役割」について調査研究を進めている。

## 精神看護学教育研究分野

## 〔原 著〕

1. 岩崎弥生, 石川かおり, 清水邦子, 宮崎澄子: 精神障害者の家族のケア提供上の対処—家族の応答性と自己配慮. 日看科会誌, 22(4), 21—32, 2002.
2. 石川かおり, 清水邦子, 岩崎弥生, 宮崎澄子: 地域で生活する精神障害者の日常生活の自己管理. 千大看紀要, 24, 15—21, 2002.

## 〔学会発表抄録〕

3. Iwasaki, Y.: Workshop, Issues around Disaster Nursing. Second International Conference of the Post FIPSE-EU Consortium, 2002.
4. Shimizu K., Iwasaki Y., and Ishikawa K.: Coping of Japanese Families: Caring for Patients with Mental Illness. 7<sup>th</sup> European Mental Health Nursing Conference Programme, 27, 2002.
5. Saito K., Ishikawa K., Hara A., Sakata N., Ono S., and Hayazaki S.: Evaluating the Psychometric Properties of the WHO Quality of Life Questionnaires among Japanese Elderly. International Conference on Traditions, Evidence and Innovations in Nursing, 181, 2002.
6. 荻野雅: 精神科看護と病棟文化, シンポジウム「精神科看護の常識と非常識」. 日本精神保健看護学会第12回総会・学術集会プログラム・抄録集, 128—129, 2002.
7. 荻野雅: 精神科看護における「わざ」と「知恵」, 第28回高知女子大学看護学会シンポジウム「看護援助の効果を明らかにする—看護の「わざ」と「知恵」の開発をめざして」. 高知女子大学看護学会誌, 11, 2002.
8. 沢田秋, 大西美紀, 萱間真美, 松浦彩美, 河野由理, 瀬戸屋希, 安保寛明, 岡谷恵子, 野嶋佐由美, 宇佐美しおり, 荻野雅, 山崎千鶴子, 宮本有紀: 精神科急性期病棟における看護ケア量測定を試み第1報—看護ケア回数とケア時間—. 第22回日看科会学術集会講演集, 127, 2002.

9. 安保寛明, 河野由理, 萱間真美, 沢田秋, 大西美紀, 松浦彩美, 瀬戸屋希, 岡谷恵子, 野嶋佐由美, 宇佐美しおり, 荻野雅, 山崎千鶴子, 宮本有紀: 精神科急性期病棟における看護ケア量測定の試み 第2報—看護ケア量と関連をもつ指標の測定—. 第22回日看科会学術集会講演集, 128, 2002.
10. 瀬戸屋希, 萱間真美, 松浦彩美, 大西美紀, 沢田秋, 河野由理, 岡谷恵子, 野嶋佐由美, 宇佐美しおり, 荻野雅, 山崎千鶴子, 宮本有紀, 安保寛明: 精神科急性期病棟における看護ケア量測定の試み 第3報—看護ケア量とアウトカムとの関連—. 第22回日看科会学術集会講演集, 129, 2002.
11. 稲垣絹代, 片山聡子: 老年看護学実習による老人イメージの変化について. 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 335, 2002.
12. 岩崎弥生: 異文化で看護する. 第27回国際看護研究会, 2002.

#### 〔報告書〕

13. 岩崎弥生, 石川かおり, 清水邦子: 精神障害者の家族支援システムの開発に関する研究. 平成13年度文部科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)課題番号11672363〕総合報告書, 2002.

#### 〔その他〕

14. 岩崎弥生: 家族の変化に寄り添う援助を. 看護, 54(7), 28—32, 2002.
15. 岩崎弥生, 清水邦子, 石川かおり, 齋藤和子: 千葉大学看護学部—アラバマ大学間の国際交流. Quality Nursing, 8(6), 17—21, 2002.
16. Susan W. G., (岩崎弥生 監訳): 日米の看護学生間の文化交流プログラム. Quality Nursing, 8(6), 22—26, 2002.
17. 荻野雅: 研究成果を実践現場に還元するには, シンポジウム I 「看護現象の着眼と研究の方法—質的研究を中心に」. 日看研誌, 25(2), 128—129, 2002.
18. 荻野雅: CNSと看護チームの接点, 看護職とかかわりある治療メンバーの活動. 月刊ナースデータ, 23(7), 54—58, 2002.
19. 石川かおり: Alabama州Tuscaloosaにおける精神障害者の地域ケア. 千大看紀要, 24, 37—40, 2002.

#### 〔単行書〕

20. 岩崎弥生: 看護介入分類 (NIC). 原著第3版, Joanne C. McCloskey, Gloria M. Bulechek (著) 中木高夫, 黒田裕子 (監訳), 南江堂, 2002.

#### 〔研究状況〕

精神看護学教育研究分野では施設内あるいは地域の精神的諸問題を持つ人々とその家族のQuality of Lifeの向上を目指し, 精神障害者と家族ケア提供者の抱える問題と援助方法に関する研究を継続している。

家族ケア提供者に関する研究として, 平成11年度より文部科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2), 代表 岩崎弥生) を受け「精神病患者の家族支援システムの開発に関する研究」に取り組み, 平成13年度の研究成果を報告した (1, 4, 13)。また岩崎は家族の変化に添う援助 (14) について発表した。

精神障害者に関する研究として, 日常生活上の自己管理 (2), および高齢者のQOLに関する調査 (5) についてまとめ発表した。また, 石川はアラバマ州タスカルーサにおける精神障害者の地域ケアの実態についても報告した (19)。

施設内における援助に関する研究として, 荻野は精神科看護における援助の効果を明らかにし (7), 看護ケア量の測定を試みた (8, 9, 10)。さらに, 精神科看護の病棟文化 (6), 看護研究方法 (17), およびCNSの取り組み (18) についても報告した。

その他, 岩崎は災害看護について発表した (3) ほか, 看護介入分類に関するテキストを改訂した (20)。また, 千葉大学—アラバマ大学間の国際交流についてこれまでの成果をまとめ報告した (15, 16)。

## 地域看護学教育研究分野

## 〔学会発表抄録〕

1. 牛尾裕子, 武藤紀子, 浦奈穂美, 宮崎美砂子, 岡本恵子, 強口喜久江, 新田祥枝: 地域資源充実に関わる保健所保健婦・士の看護判断. 第5回日本地域看護学会講演集, 100, 2002.
2. 浦奈穂美, 武藤紀子, 牛尾裕子, 宮崎美砂子, 桜庭けい子, 岩井多佳子: B型機能訓練事業を通して行う地区活動の特徴. 第5回日本地域看護学会講演集, 88, 2002.
3. 牛尾裕子, 大室律子, 吉本照子, 本田彰子, 佐藤禮子: 市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究. 千葉看第8回学術集會集録, 15, 2002.
4. 宮崎美砂子, 井出成美, 山田洋子, 武藤紀子, 牛尾裕子: 広域地域におけるケア体制づくりの経年的な積み重ね方の検討. 第61回日公衛会抄録集, 49(10)特, 530, 2002.
5. 武藤紀子, 石川麻衣, 牛尾裕子, 宮崎美砂子: 学士・看護基礎教育課程における家庭訪問実習の学習到達状況から見た教育内容の検討. 第61回日公衛会抄録集, 49(10)特, 491, 2002.
6. 石川麻衣: 看護職が勤務している保育所における地域支援活動の特徴. 第61回日公衛会抄録集, 49(10)特, 669, 2002.
7. 漆崎育子, 佐藤裕子, 山岸秋子, 山本多喜子, 徳満静子, 小倉敬一, 渡部美根子, 新保寛子, 宮崎美砂子, 北池正: 閉じこもり予防訪問活動から健康指標の抽出. 第61回日公衛会抄録集, 49(10)特, 527, 2002.

## 〔報告書〕

8. 宮崎美砂子, 平山朝子, 井出成美, 山田洋子, 牛尾裕子, 武藤紀子, 浦奈穂美: 地域を単位とした在宅ケアの質の向上にかかわる看護判断の構造. 平成11年度~平成13年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 1—109, 2002.
9. 佐藤禮子, 大室律子, 本田彰子, 吉本照子, 牛尾裕子: 市町村保健師の職場内における現任教育の現状. 平成14年度千葉大学看護学部研究班調査報告書, 1—16, 2002.
10. 上野まり, 鈴木育子, 本田彰子, 石垣和子, 牛尾裕子, 山田洋子, 井出成美, 宮崎美砂子: 介護保険制度が在宅療養者の生活に与えた影響と今後の課題. 平成12・13年度千葉市地域連携推進事業報告書, 1—38, 2002.

## 〔その他〕

11. 宮崎美砂子: 学生の主体性を引き出す実習方法〔2〕学生単独で行う家庭訪問実習プログラムの意義, *Quality Nursing*, 8(2), 75—82, 2002.
12. 武藤紀子, 浦奈穂美, 牛尾裕子, 宮崎美砂子: 家庭訪問実習における地域看護教育方法の検討, 千大看紀要, 24, 63—71, 2002.
13. 北池正, 宮崎美砂子: 日本の看護学教育における国際交流の実態と課題, *Quality Nursing*, 8(6), 4—8, 2002.

## 〔研究状況〕

当研究分野は地域看護学の教育方法に関する研究を継続しており, 本年は家庭訪問実習に関する研究を行った. 武藤は, 現地保健師との協働のあり方に焦点をあてて家庭訪問実習の教育方法を検討し(12), さらに学習到達状況からその教育内容を検討した(5). また, 宮崎は学生の主体性を引き出す実習方法として, 当研究分野で実施している学生単独で行う家庭訪問実習の意義についてまとめた(11).

本年は, 平成11~13年度文部科学省科学研究費にて, 宮崎が研究代表者として行った「地域を単位とした在宅ケアの質の向上にかかわる看護判断の構造」の報告書をまとめた(8). 研究成果の一部として, 宮崎は, 広域地域におけるケア体制づくりの経年的な積み重ね方について発表し(4), 牛尾は, 地域資源充実に関わる保健所保健師の看護判断について発表した(1).

牛尾は, 市町村保健師の職場内における現任教育の現状を調査し, 保健師の現任教育の内容や方法の開発において重要となる点をまとめ発表した(3, 9). 浦は, B型機能訓練事業を通して行う地区活動の

特徴について発表した(2)。石川は、修士論文の一部である看護職が勤務している保育所における地域支援活動の特徴について発表した(6)。

## 訪問看護学教育研究分野

### 〔原著〕

1. 山本則子, 石垣和子, 国吉緑, 河原(前川)宣子, 長谷川喜代美, 林邦彦, 杉下知子: 高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL), 生きがい感および介護継続意思との関連: 続柄別の検討. 日本公衛誌, 49(7), 660—671, 2002.
2. 新井香奈子, 石垣和子: 特別養護老人ホームとケアハウス入所高齢者における皮膚の乾燥(ドライスキン)症状の特徴と分類. 老年看護学, 7(1), 35—44, 2002.
3. 高林智子, 長田早千穂, 平口志津子, 大中敬子, 片倉直子, 石垣和子: 市町村保健師の行う痴呆電話相談の相談者の実態とその効果について. 日本公衛誌, 49(12), 1250—1258, 2002.

### 〔学会発表抄録〕

4. Kazuko Ishigaki: Japanese perspective from nursing. The workshop of international collaboration on the health promotion of the elderly in Asia, 59—60, 2002.
5. Kazuko Ishigaki: Nursing education in graduate schools in Japan. International Workshop on Nursing Education (Sichuan University) Chengdu, China. 25—26, 2002.
6. 片倉直子, 佐藤泉, 淵田英津子, 西田麻子, 伊藤範子, 胡秀英, 篠崎友子, 山下和彦, 久道由美, 大中敬子, 新井香奈子, 石垣和子: 転倒予防運動集団指導への保健師の個別介入効果とその介入内容に関する研究. 日公衛会抄録集, 49(10)特, 754, 2002.
7. 伊藤隆子, 上野まり, 石垣和子: 介護保険施行後の在宅介護支援センターの構造と機能の変化. 日公衛会抄録集, 49(10)特, 782, 2002.
8. 片倉直子, 久道由美, 新井香奈子, 石垣和子, 他: 介護予防事業の効果に関する研究. 日本老年看護学会第7回学術集会抄録集, 61, 2002.
9. 新井香奈子, 石垣和子, 駒田陽子, 片倉直子, 他: 生きがい対応型デイサービス事業に参加している在宅高齢者の睡眠実態に関する研究. 日本老年看護学会第7回学術集会抄録集, 85, 2002.
10. 田中芳和, 石垣和子, 苔米地伸, 安梅勅江: 都市近郊部における地域保健福祉職と地域住民の認識する近隣関係及び介護意識の実態. 日本老年看護学会第7回学術集会抄録集, 143, 2002.
11. 上野まり: 在宅療養者と家族介護者の異なる思いに沿う訪問看護師の援助行動. 家族看護学研究, 8(1), 66, 2002.

### 〔報告書〕

12. 石垣和子: 平成13年度老人保健健康増進事業 高齢者の自立支援及び元気高齢者作りのための調査研究等事業「フットケアの在り方に関する調査研究報告書」. 原田昭太郎委員長, 21—46, 2002.
13. 石垣和子: 平成13年度老人保健健康増進事業 介護予防の普及に関する研究事業報告書「浜松班」. 地域保健研究会, 73—136, 2002.
14. 石垣和子: 平成13年度先駆的保健活動交流推進事業「保健所保健活動モデル事業報告書」. 日本看護協会, 1—32, 2002.
15. 上野まり, 鈴木育子, 本田彰子, 石垣和子, 牛尾裕子, 山田洋子, 井出成美, 宮崎美砂子: 平成12, 13年度千葉市地域連携推進事業報告書「介護保険制度が在宅療養者の生活に与えた影響と今後の課題」. 2002.

### 〔その他〕

16. 石垣和子, 兼子いずみ: 地域ぐるみの転倒予防. コミュニティケア, 4(7), 38—41, 2002.
17. 胡秀英, 石垣和子: 日本独特的訪問看護学現状及其教育課題. Nursing education in graduate

schools in Japan. International Workshop on Nursing Education, 50—51, 2002.

18. 石垣和子：介護予防にどう取り組むか—地域システムの課題と展望。平成14年度千葉大学公開講座 看護の連携・継続・システム化，6—7，2002.
19. 石垣和子：南多摩保健所における子どもの虐待予防活動の展開について。地域保健，33(11)，31，2002.

#### 〔単行書〕

20. 上野まり：医療依存度の高い障害児への訪問看護サービスの展開。日本訪問看護振興財団事業部，訪問看護白書 訪問看護10年の歩みとこれからの訪問看護。日本看護協会出版会，61—64，2002.
21. 上野まり：人事管理，訪問看護管理マニュアル。川村佐和子・島内節監修，日本看護協会出版会，44—50，2002.

#### 〔研究状況〕

平成14年は，上野を代表者とする「介護保険制度が在宅療養者の生活に与えた影響と今後の課題（千葉市補助金）」を3月に終了し，新たに石垣を主任研究員とする「訪問看護事業におけるサービス提供実態に関する調査研究（全国訪問看護事業協会からの委託）」を9月より行っており，この調査研究には鈴木が加わっている。前者については報告書（15）作成を行った。また石垣，上野を中心として全国規模での在宅介護支援センター状況調査を行い，介護予防にむけての基盤や考え方について把握した。この全国調査の引き金となった調査については学会発表（7）を行った。中国四川大学との2年間の国際共同研究の初年度として，「高齢者のヘルスプロモーションにおける看護の役割」を開始している。これに関連して石垣が，日本のヘルスプロモーションに関する看護研究の現況報告を日本にて，日本の看護大学院教育について報告を中国にて行った（4，5）。この研究は，日本の浜松市と中国の成都市をフィールドとし，石垣，上野，大学院生がかかわっている。他に平成13年度に引き続いた高齢者の皮膚ケア方法開発研究（科研費）を行っており，それに関する高齢者の皮膚アセスメント方法について報告した（2）。

上野と鈴木は，継続看護研究部とともに行なった「訪問看護婦への継続看護教育を含む実践教育の開発」に関する研究を3月で終了し，引き続き，「高齢者在宅療養者支援スタッフの実践教育方法の開発に関する研究」として，訪問看護師の実践教育に関する研究を継続している。

研究プロジェクトとは別に，研究方法の理解促進のための抄読会を2つ立ち上げた。1つは質的研究方法の主なものを理解するためのものであり，もうひとつは多くの質的研究結果からメタ分析によって新たな所見を得るメタ研究方法を獲得するためのものである。前者は分野内で行っているが，後者は他の分野とともにしている。

また，継続看護研究部とともに2000年9月より開催している「訪問看護事例検討会」（月刊ばんぼう，最新ネットワーク図鑑，124—127，2002. 8）は，現在も継続中である。

## 保健学教育研究分野

#### 〔原著〕

- 1) Yukiko Miyazaki, Hiroshi Koyama, Masami Nojiri, Shosuke Suzuki: Relationship of dietary intake of fish and non-fish selenium to serum lipids in Japanese rural coastal community. *Journal of Trace Elements in Medicine and Biology*, 16, 83-90, 2002
- 2) Y. Shimada, M. Shima, M. Adachi, M. Nojiri: Risk factors for death from lifestyle-related diseases: a 10-year follow-up study of subjects who underwent health examination in Shizuoka prefecture in 1985. *千葉医学*, 78(1), 15—28, 2002
- 3) 深田順子，鎌倉やよい，北池正，野尻雅美：在宅高齢者のための嚥下障害リスク評価に関する尺度開発。日看研誌，25(1)，87—99，2002
- 4) 深田順子，鎌倉やよい，北池正：在宅高齢者の嚥下機能に影響する要因。日摂食嚥下リハ会誌，6(1)，38—48，2002

**〔学会発表抄録〕**

- 5) 北池正, 増本品: 精神障害者に対する地域住民の意識調査. 日本公衛誌, 49(10) (特), 812, 2002
- 6) 宮崎有紀子, 小山洋, 笹田陽子, 佐藤洋, 野尻雅美, 鈴木庄亮: 山間部と沿岸部の2地域における食品摂取傾向およびセレン摂取傾向の特徴. 日本公衛誌, 49(10) (特), 884, 2002
- 7) 増本品, 北池正: 中学生のストレスと対処行動について. 日本公衛誌, 49(10) (特), 663, 2002
- 8) 南雲孝代, 鈴木公典, 高谷真由美, 鈴木桂子, 増本品, 宮崎有紀子, 北池正, 野尻雅美: 結核患者の治療成績に関わる保健所保健師の療養生活支援に関する研究. 日本公衛誌, 49(10) (特), 839, 2002
- 9) 漆崎育子, 佐藤裕子, 山岸秋子, 山本多喜子, 徳満静子, 小倉敬一, 渡部美根子, 新保寛子, 宮崎美砂子, 北池正: 閉じこもり予防訪問活動から健康指標の抽出. 日本公衛誌, 49(10) (特), 527, 2002
- 10) Maru, M., Nakayama, M., Miyazaki, Y., & Kudo Y.: Relationships among lifestyles, bone fatness, and calcaneal bone mass in Japanese adolescents. International Journal of Behavioral Medicine, 9 (suppl. 1), 181, 2002

**〔その他〕**

- 11) 北池正, 宮崎美砂子: 日本の看護学教育における国際交流の実態と課題. Quality Nursing, 8(6), 476—480, 2002
- 12) 野尻雅美: 農村の健康生態: 海辺から—静岡県西伊豆地区N町K村からの報告—. 公衆衛生, 66(9), 655—661, 2002
- 13) 野尻雅美: 農村におけるウーマンヘルス, 農村医学の歴史と21世紀の展望. 日農医誌50 (特別号), 164—165, 2002

**〔研究状況〕**

保健学教育研究分野は, 地域集団を対象として, 住民の健康問題を生活環境との関連で解明することを目的に研究に取り組んでいる。

北池らは, 在宅高齢者の嚥下機能を把握するためリスク評価に関する尺度開発を行い, さらに運動習慣や咀嚼力との関連について明らかにした (3, 4)。こころの健康に関しては, 精神障害者に対する地域住民の理解と受け入れについて調査を行い (5), 中学生の部活動におけるストレスと対処行動について調査を行った (7)。

宮崎らは, 簡易食品摂取頻度調査票を用いた栄養調査から地域住民のセレン摂取量を推定し, 血清脂質との関連を明らかにする (1) とともに, 山間部と沿岸部の食品摂取傾向の特徴を記述した (6)。また思春期のライフスタイルと骨密度の関連を検討した (10)。

野尻らは, 静岡県西伊豆地区における疫学調査から, 文部省科学研究費補助金による研究として, ほけ・ねたきり老人の予知と予防に関する疫学研究を実施し, N町K村昭和60年健診コホート10年の生命・生活予後の生活習慣病死のリスク要因を明らかにした (2)。また農村におけるヘルスプロモーションに関して自験例を中心にまとめた (12, 13)。

**継続看護研究部**

**〔学会発表抄録〕**

1. 田口裕彦, 本田彰子: 看護職者の専門性に対する認識とその変化の過程. 日本看護学教育学会第12回学術集会講演集, 96, 2002.
2. 神明直美, 中島孝子, 本田彰子: 集中治療室に入室した患者の家族が持つニーズ—保証のニーズ充足に影響する要因について—. 第4回日本救急看護学会学術集会プログラム・抄録集, 89, 2002.
3. 牛尾裕子, 大室律子, 吉本照子, 本田彰子, 佐藤禮子: 市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究. 千葉看護学会第8回学術集会集録集, 15, 2002.



〔報告書〕

4. 上野まり, 鈴木育子, 本田彰子, 石垣和子, 牛尾裕子, 山田洋子, 井出成美, 宮崎美砂子: 介護保険制度が在宅療養者の生活に与えた影響と今後の課題. 平成12・13年度千葉市地域連携推進事業報告書, 2002.
5. 佐藤禮子・大室律子・本田彰子・吉本照子・牛尾裕子: 市町村保健婦の職場内における現任教育の現状. 平成14年度千葉大学重点整備費研究助成調査報告書, 2002.

〔その他〕

6. 本田彰子・牛久保美津子: 新人看護職者の臨床実践能力に対する評価—指導的立場の看護職者の視点から—. 千大看紀要, 53—56, 2002.

〔単行書〕

7. 本田彰子: 5. 在宅酸素療法を受ける患者の看護 第3章慢性疾患看護のコツとワザ. 浅野美知恵編著, Nursing Mook13慢性疾患ナーシング. 学習研究社, 182—187, 2002.

〔研究状況〕

本研究部では, 訪問看護師の現任教育, 特に職場内教育の方法について研究している. 平成14年度プロジェクト研究では, 訪問看護師の現任教育に関して, 訪問看護管理者を対象に, 現状の課題, 学習ニーズの調査を行い, 職場内教育の重要性を確認した. それに基づき, 訪問看護における, 個別的で多様性に富む職場内教育を計画的・効率的に行うためのツールを開発中である.

本田は, テーマ別研究研修参加者およびプロジェクト研究共同研究者とともに, 専門性の認識および臨床能力評価に関する共同研究を行い発表した(1, 5). これまでの在宅看護の経験から, 介護保険制度からの在宅療養者の生活への影響に関する訪問看護教育研究分野の研究に参加し(4), 在宅療養における具体的な看護実践方法を表した(7). また, 医療施設臨床看護師の看護研究指導に多く関わっており, 臨床看護研究の成果を表した(2).

赤沼は, プロジェクト研究において, 一般企業におけるOJT技法の訪問看護師の職場内教育への適応を検討した. また訪問看護実践経験の総括を行った. 特に, 在宅における日常生活援助に関する検討し, 在宅療養における援助技術のテキストの執筆, 訪問看護実践者の事例検討会, 訪問看護婦養成講習会において観察とアセスメント・看護過程の展開に関する講義で検討結果を表した.

## 老人看護研究部

〔原著〕

1. 太田節子, 佐藤禮子: 観血的治療を受ける高齢大腿骨頸部骨折患者の回復過程と看護援助に関する研究, 千葉看会誌, 8(1), 30—39, 2002.

〔学会発表抄録〕

2. 根本敬子, 湯浅美千代, 佐瀬真粧美: 入院中の患者の体験と看護記録への記載内容, 看護師が把握していたことの相違の実態, 千葉看会第8回学術集会抄録集, 13, 2002.
3. 太田節子: F. ナイチンゲールの認識を探る—小管理の今日的意義—, 第23回ナイチンゲール研究懇談会, 2002.
4. 太田節子, 佐藤禮子: 観血的治療を受けた高齢大腿骨頸部骨折患者の退院後1年の身体・心理・社会的特徴, 第7回日本老年看護学会抄録集, 58, 2002.
5. 太田節子, 佐藤禮子: 観血的治療を受ける高齢大腿骨頸部骨折患者の身体的特徴と回復への援助, 第22回日看科会誌, 347, 2002.

〔その他〕

6. 太田節子：青少年の生活習慣病，臨床看護，28(7)，1081—1084，2002.

〔研究状況〕

太田らは，高齢大腿骨頸部骨折患者の入院から退院後に至る回復過程を研究し，適切な看護援助を行うことによって，高齢者が治療後の再骨折を予防して，「寝たきり」ではない，自立（律）的な日常生活を営むことができることを目標とする看護援助方法を研究している（1，4，5）。また，太田は，F. ナイチンゲールの著書『看護覚え書』の第3章「小管理」を質的に検討し，複雑多岐な医療の場では，看護職個々が，F. ナイチンゲールが提示している看護管理の本質を正しく理解して看護実践に活かすことが，医療過誤を防ぎ，良い看護を提供し患者の日常生活の質を高める役割を担うこととなることを研究懇談会で発表した（3）。

根本らは，入院中に抱えている患者の思いと看護記録に記載されている内容，看護師が把握していたことの相違の実態とその考察を発表した（2）。

今後，老人看護研究部では「高齢患者のセルフケア能力に関するアセスメント」と「高齢者の日常生活行動におけるセルフケア能力の維持・向上をはかる看護援助」について調査し研究をしていく予定である。

看護管理研究部

〔原著〕

1. 久保武士，重光忠彦，安積端博，高橋真理，大室律子：一産科診療施設における産科医師の必要数についての検討。Health Sciences，18(2)，123—128，2002.

〔学会発表抄録〕

2. 久保咲子，大室律子：臨地実習指導者の指導に関する意識調査—自己評価を実施して得た知見から—。日本看護学教育学会第12回学術集会講演集，55，2002.
3. 葉久真理，竹内美恵子，大室律子，高橋みや子：わが国の助産師教育に影響を及ぼした政策的要因に関する研究。日本母性衛生学会第43回学術集会抄録集，102，2002.
4. 牛尾祐子，大室律子，吉本照子，本田彰子，佐藤禮子：市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究。千葉看会第8回学術集会集録，15，2002.
5. 大室律子，酒井郁子，湯浅美千代，佐藤まゆみ，佐藤禮子：看護系大学卒業生の活用・育成に関する看護師長の意識。第22回日看科会講演集，81，2002.

〔報告書〕

6. 佐藤禮子，大室律子，酒井郁子，佐藤まゆみ，湯浅美千代：看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護管理者の意識。千葉大学研究班，平成13年度学長裁量経費（教育改善推進費）調査報告書，1—77，2002.
7. 佐藤禮子，大室律子，本田彰子，吉本照子，牛尾裕子：市町村保健師の職場内における現任教育の現状。千葉大学研究班，平成13年度学長裁量経費（教育改善推進費）調査報告書，1—16，2002.

〔その他〕

8. 大室律子：助産婦教育への期待。看護教育，43(1)，50—53，2002.
9. 山口千鶴子，大室律子：現任教育による資質の向上—富山医科薬科大学附属病院の場合—。看護教育，43(2)，124—127，2002.
10. 瀧口章子，大室律子：人間は生涯学習する。看護教育，43(3)，216—219，2002.

〔研究状況〕

本研究部では，看護サービスと患者満足の観点から，看護職者の人材開発と看護政策に関する研究を広

範囲に行っている。本年度は、平成13年度学長裁量経費（教育改善推進費）を基に「看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護職者の意識」、並びに「市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究」について調査成果を発表（4, 5）し、これらの調査結果を「調査報告書」（6, 7）としてまとめた。また実践者との共同研究として看護系大学の「臨地実習指導者の指導に関する意識調査」を行い発表（2）した。

看護政策的な観点から平成12年度から継続して行った教員との共同研究「我が国の助産師教育に影響を及ぼした政策的要因」の研究成果を発表（3）した。

産科診療における産科医師の必要数について助産師の観点から周産期診療のマンパワー不足解消について考察（1）した。また、看護職者の生涯学習ニーズに関し助産師教育への期待、現任教育に関する資質の向上についての成果も報告（8, 9, 10）した。

## 病院看護システム管理学

### 〔学会発表抄録〕

1. 屋敷ひめお, 手島恵: 転倒・転落事故後の記録の現状—事故後の記録から要因・内容の分析, 日看研誌, 25(3), 106, 2002
2. 竹光三枝子, 手島恵: 入院時オリエンテーションにおける「安全」に関する情報提供の実態, 日看研誌, 25(3), 107, 2002
3. 須佐真由美, 手島恵: 看護師の「看護サービス」についての意識調査, 日看研誌, 25(3), 243, 2002
4. 永野みどり, 徳永恵子, 吉永圭吾, 塚田邦夫, 杉原健一: ストーマ周囲皮膚障害に対するハイドロコロイドドレッシングの使用経験, 日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 6(1), 26, 2002
5. 櫻井智穂子, 佐藤禮子, 増島麻里子: 終末期のがん患者と家族の在宅療養に関わる意思決定. 第22回日看科学学術集会講演集, 273, 2002
6. 緒方久美子, 手島恵, 永野みどり, 櫻井智穂子: 看護職者のストレスに関する研究の成果と今後の課題—1990年～2000年の文献検討—. 第22回日看科会学術集会講演集, 167, 2002

### 〔その他〕

7. 手島恵: 代替・相補医療とがん看護, 第16回日本がん看護学会学術集会講演集, 42, 2002
8. 永野みどり: 緩和医療における褥瘡ケア, 緩和医療学, 4(4), 80—85, 2002

### 〔単行書〕

9. 徳永恵子, 永野みどり: 3章-I-7皮膚・粘膜(創傷・褥瘡)に関するケア, 川村佐和子, 島内節監修日本訪問看護振興財団編集: 訪問看護管理マニュアル, 日本看護協会出版会, 196—206, 2002
10. 永野みどり: 第3部-IV-3皮膚障害の理解. 第3部-IV-2アセスメント, 日本看護協会認定看護師制度委員会創傷ケア基準検討会編著: 瘻孔・ドレーンのケアガイダンス, 看護協会出版会, 133—137, 2002
11. 永野みどり: 第7部-I-A-1炎症性腸疾患に伴う瘻孔. 第7部-I-A-2腸瘻, 日本看護協会認定看護師制度委員会創傷ケア基準検討会編著: 瘻孔・ドレーンのケアガイダンス, 看護協会出版会, 219—249, 2002
12. 永野みどり: 第1部-VI粘着テープによる皮膚障害のスキンケア, 日本看護協会認定看護師制度委員会創傷ケア基準検討会編著: スキンケアガイダンス, 看護協会出版会, 91—103, 2002
13. 永野みどり: 第3部-V放射線療法をうけている人のスキンケア, 日本看護協会認定看護師制度委員会創傷ケア基準検討会編著: スキンケアガイダンス, 看護協会出版会, 193—201, 2002
14. 永野みどり: 第15課褥瘡ケア, 渡辺裕子監修: 家族看護学を基盤とした在宅看護論II, 日本看護協会出版会, 277—288, 2002

## 〔研究状況〕

平成14年度に開設された病院看護システム管理学では、サービス（4）、患者満足の観点からの組織管理、リスクマネジメント（2、3）、看護職のストレス（6）ならびに患者・家族の意思決定（5）に関する研究に取り組み報告した。

永野は、認定看護師として提供する実践（4、9—14）をまとめた。

看護実践研究指導センターのプロジェクト研究共同研究員2名と患者の意思決定を擁護するシステムに関する研究に取り組むとともに、臨床実習指導者を主たるテーマとした研修生3名の課題研究指導を担当している。

## 地域高齢者看護システム管理学

## 〔原著〕

1. 島田広美, 井上聡子, 遠藤淑美, 末永由理, 佐藤弘美, 酒井郁子: 在宅脳血管障害者の地域参加のきっかけと参加を支えている要因と援助の検討. 川崎市立看護短期大学紀要, 7(1), 55—59, 2002.

## 〔学会発表抄録〕

2. 吉本照子, 柳澤尚代, 前川厚子, 波川京子, 阿部芳江, 疋田理津子: 介護保険システム導入における行政保健婦・士の貢献と事務職がもつめる全体的視野. 第5回日本地域看護学会学術集会講演集, 99, 2002.
3. 酒井郁子, 湯浅美千代, 渡辺洋子, 馬場寛子, 吉井芳美: 中堅看護師研修プログラムの効果の検討. 第33回日看会抄録(看護管理), 134, 2002.
4. 酒井郁子, 杉田由加里, 吉本照子: 高齢者の睡眠障害に対する予防的看護のための体動測定法の適用. 第22回日看科会学術集会, 339, 2002.
5. 吉本照子, 酒井郁子, 杉田由加里: 高齢者の睡眠障害の予防に向けた看護のシステム化の課題. 第22回日看科会学術集会, 340, 2002.
6. 柳澤尚代, 吉本照子, 前川厚子, 波川京子, 疋田理津子, 阿部芳江: 4自治体の介護保険システム構築のステップ—保健婦と事務職との連携・協働の活動より—. 第5回日本地域看護学会学術集会講演集, 115, 2002.
7. 藤田万智子, 周郷朋子, 荒川静世, 脇本野枝, 酒井郁子: 成人の重症心身障害者を抱えた母親の育児・介護体験. 家族看護学研究, 8(1), 51, 2002.
8. 斎藤美紀子, 八島妙子, 茂野香おる, 酒井郁子, 吉本照子: 退院後に小児がん患児の親が直面する問題とその対処について. 家族看護学研究, 8(1), 81, 2002.
9. 大野稔子, 吉本照子, 酒井郁子: ゲイ・HIV感染患者のセルフケアにおける課題と援助の検討. 千葉看会第8回学術集会集録, 28—29, 2002.
10. 湯浅美千代, 酒井郁子, 渡辺洋子, 馬場寛子, 吉井芳美: 大学教員と病院管理者の連携による研修を目指して. 千葉看会第8回学術集会集録, 14, 2002.
11. 牛尾裕子, 大室律子, 吉本照子, 本田彰子, 佐藤禮子: 市町村保健師の職場内における現任教育に関する研究. 第8回千葉看会学術集会集録, 15, 2002.
12. 藤田緑, 松崎美智子, 滝道内浩子, 島田広美, 末永由理, 酒井郁子: 在宅脳血管障害患者の学習ニーズと看護師がとらえている学習ニーズの比較. 第33回日看会抄録(地域看護), 40, 2002.
13. 波川京子, 吉本照子, 近藤裕子, 柳澤尚代: 配食ボランティア活動が引き出す住民と行政の連携—O町の事例から—. 日公衛会誌, 49(10), 503, 2002.
14. 松崎美智子, 藤田緑, 滝道内浩子, 島田広美, 末永由理, 酒井郁子: 脳血管障害患者の学習の必要性に関する看護師の意識. 第33回日看会抄録(看護管理), 158, 2002.
15. 茂野香おる, 八島妙子, 斎藤美紀子, 酒井郁子, 吉本照子: 介護老人保健施設における施設内サービス計画立案時の看護管理者の調整の実態について. 第7回日本老年看護学会学術集会抄録集, 182, 2002.

16. 島田広美, 末永由理, 酒井郁子: 脳血管障害患者の学習ニーズ. 第22回日看科会講演集, 151, 2002.
17. 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代, 佐藤禮子: 看護系大学卒業者の活用, 育成に対する看護師長の意識. 第22回日看科会講演集, 169, 2002.

〔報告書〕

18. 佐藤禮子, 大室律子, 酒井郁子, 佐藤まゆみ, 湯浅美千代: 看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護管理者の意識. 千葉大学教育改善推進事業調査報告書, 2002.
19. 佐藤禮子, 大室律子, 本田彰子, 吉本照子, 牛尾裕子: 市町村保健師の職場内における現任教育の現状. 千葉大学教育改善推進事業調査報告書, 2002.

〔その他〕

20. 酒井郁子, 佐藤弘美, 島田弘美: 在宅脳血管障害患者における老化の知覚と維持期リハビリテーションの取り組み. 日本老年看護学会学会誌, 7(1), 26—34, 2002.
21. 酒井郁子, 湯浅美千代, 吉本照子, 野口美和子: 大学教員がとらえている学習者としての看護実践者の特徴と継続教育を行う上での信念. 千大看紀要, 24, 57—61, 2002.
22. 酒井郁子: 脳血管障害患者の生活の再構築を支える看護の専門性を考える—文献検討から. Quality Nursing, 8(3), 192—198, 2002.
23. 吉本照子 (監修): 冬の入浴を快適に. はれやか, 8(11), 4—6, 生活の友社, 2002.
24. 杉田由加里: 大腿骨頸部骨折で入院してきた痴呆のある高齢患者の事例をとおして. 実践看護研究会設立記念公開研究会プログラム, 2, 2002.
25. 吉本照子, 酒井郁子, 杉田由加里: 高齢者の睡眠障害に対する予防的看護方法の開発. 千葉大学オープン・リサーチ, 25, 2002.
26. 酒井郁子: 看護の連携・継続の現状と課題. 平成14年度千葉大学公開講座看護の連携・継続・システム化, 2—3, 2002.
27. 吉本照子: 看護のシステム化を推進するための教育支援. 平成14年度千葉大学公開講座看護の連携・継続・システム化, 8—9, 2002.
28. 柳澤尚代, 吉本照子, 前川厚子, 波川京子, 森下浩子: 行政事務職が認識した行政保健婦・士の専門能力と活動, および今後の役割への期待—4自治体の介護保険システム導入過程における協働の事例から—. 日本地域看護学会誌, 4(1), 100—105, 2002.
29. Johnson, J., Pearson, V., 酒井郁子: 脳卒中患者のための教育コース—障害と共に生きることを支援する. Quality Nursing, 8(3), 199—207, 2002.
30. 中村伸江, 吉本照子: 看護教育国際協力会議における討議から. Quality Nursing, 8(6), 9—16, 2002.
31. 加納佳代子, 吉本照子, 小原美江, 大石都紀子: 第20回千葉県看護研究学会記念シンポジウム 看護実践と研究を結ぶ—過去・現在・未来—. (社)千葉県看護協会設立20周年記念看護論文・記念シンポジウム, 33—35, 2002.

〔単行書〕

32. 吉本照子: ライフスタイルとしてのケアリング. ライフスタイル2002, 藤村眞示, 矢野明彦 (編), FAPジャーナル, 220—237, 2002.
33. 酒井郁子: 身体運動機能の低下を予防し日常生活の拡大を図る. 家族看護学を基盤として在宅看護論Ⅱ【実践編】, 渡辺裕子 (監修), 193—211, 日本看護協会出版会, 2002.
34. 綿貫成明, 酒井郁子, 竹内登美子: せん妄のアセスメントツール①日本語版ニーチャム混乱・錯乱スケール. せん妄 すぐに見つけてすぐに対応, 一瀬邦弘, 太田喜久子, 堀川直史 (監修), 照林社, 26—39, 2002.

〔研究状況〕

2002年4月に新設された本領域では, 高齢者が各々のケアニーズに応じて地域での確な看護を受けられ

るような看護のシステム化のための知識・技術に関し、他大学の看護系教員、企業、実践者と共同研究を行っている。今年度は、高齢者における生活支援機器に関する研究に取り組み、高齢者の睡眠障害の拡大に関する予防的看護の方法（4, 5, 24）について報告した。研究の成果を、千葉大学公開講座（26, 27）、オープンリサーチ（25）等で発表した。

吉本は、研究代表者（文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(1), 萌芽研究）として介護予防、高齢者の日常生活支援機器活用に関する研究に取り組んだ。介護保険制度導入過程で認知された保健師の能力と期待される全体的視野、住民との連携の発展過程（2, 6, 13, 28）、また高齢者の睡眠障害に関する看護の実態と課題（5）を報告した。看護のシステム化のための教育支援（27, 31）について述べ、高齢者に対する健康教育の内容（23）および千葉大学普遍教育の講義内容（32）についてまとめた。

酒井は、在宅脳血管障害患者の回復過程とリハビリテーションの取り組み及び援助に関する研究を進展させ、成果を報告した（1, 14, 16, 20, 22, 29）。高齢者の睡眠障害の看護における新たな観察ツールの開発（4）及び成果（30）を報告した。さらに、看護職者の継続教育に関する知見（17, 18, 21）を得、教育プログラム開発の効果（3, 10）について報告した。リハビリテーション看護における実践者との共同研究の成果（7, 12, 14）を報告した。これらの成果を継続教育（26）、基礎教育（33）に反映させた。

杉田は、入院中の高齢者の睡眠障害及び看護支援の実態について、事例を報告した（24）。さらに2002年3月まで、市保健師として、高齢者の保健予防及び介護保険運営に携わった経験と問題認識をもとに、ケアマネジメントに関する研究計画を立案した。